

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

道

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

大川周明道徳哲学講話集

道

人格的生活の原則

中庸新註

SAMPLE 書肆心水
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

目

次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

人格的生活の原則

序

第一 道徳の自然的基礎

一 道徳的理想的確立 一六

二 人格の無限性 三

三 羞恥 二五

四 愛 憐 二九

五 敬 畏 三三

第二 人格的生活の原理

一 克己の原理 四〇

二 愛人の原理 四九

三 敬天の原理 五五

四 智仁勇の意義 七三

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

中庸新註

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

大川周明道徳哲学講話集

道

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は大川周明著『人格的生活の原則』（東京宝文館、大正十五年五月二十五日発行）『中庸新註』（大阪屋号書店、昭和二年六月十日発行）の二書を合わせ、記述内容から「大川周明道徳哲学講話集 道」の書名で括って一書としたものである。表記については左記の諸点と明白な誤植の訂正を除き原典のままである。

一、原典は旧漢字、旧仮名遣いであるが、本書では原則的に新漢字の標準字体、新仮名遣いに置き換えて表記した。但し『中庸』に属する記述においては標準字体ではない別体字は標準字体に置き換えることなくそのまま表記した。又、「弁」のように新字体に対応する複数異義の旧字体があるものは旧字体で表記した。

一、原典の鍵括弧は全て『』が使用されているが、これは全て「」に置き換えた。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した（二の字点は「々」に置き換えた）。

一、読み仮名ルビは多めに、最も常識的と考えられる読みで便宜的に補った。近接する記述における送り仮名の不統一においても送り仮名を加減するのではなく、読み仮名ルビの付加を以てそれに代えた。

一、下記のものは片仮名表記に置き換えた。希伯来、独逸、埃及、印度、羅馬、猶太、歐羅巴、基督、希臘、拉丁。

一、行内の（）括り二行割注は本書発行所が便宜的に付加した註釈である。

人格的生活の原則

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

人間は「個人的・社会的実体」なるが故に、人格的生活もまた個人的一面と社会的一面とを同時に具有する。古人は前者を明徳と名け、後者を新民と名けた。この両面を全うすることによつてのみ、吾等は至善を実現することが出来る。従つて人格的生活の原則は、明徳並に新民の原則でなければならぬ。予は實に是くの如き原則を求めつつあるものである。然るに本書に収むるところは、單に人格的生活の個人的又は主觀的一面の原則、即ち明徳の原則に過ぎない。故に内容と書名との間に懸隔あるは、予の忸怩たらざるを得ぬところである。

もと本書に包める思想は、大正十四年南予文化協会の開催にかかる夏期大学に於て試みたる講演の骨子であり、協会の要求に応じて之を公けにするに当り、詳しくは人格的生活の主觀的

人格的生活の原則

一面に於ける原則とすべきを、繁を厭いて斯くは名けたるものである。而して早かれ晩かれ、
予が公にすべき著書の一部として再録せらるべきものである。予は其著の中に、主觀両面に亘
る人格的生活の本質を闡明するに努めるであろう。

大正十五年五月

大川 周明

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第一
道徳の自然的基礎

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

人格的生活の原則

一 道徳的理想的の確立

「理想を確立する事は、人間の道徳的本質を表現する始であり、完全なる人格者となる礎である。真箇に理想が確立すれば、驢馬の鳴声も吾等の師となり、若し理想が確立しなければ、孔子も吾等の師とはならぬ。學問の途は他なし、必ず完全なる人格者たらんとの理想を抱くことである。理想は精神の統一者である。故に理想が確立すれば、一切の過失に陥ることなく、一切の欲情も忽ち消え去る。或は理想が確立しても己れに克つことが出来ぬと云う人がある。さり乍ら是くの如く言うは、未だ真箇の体察なきものである。孔子が三軍は帥を奪うべく、鄙夫も志を奪うべからずと教えられたのに鑑みて、宜しく自ら省みねばならぬ。而も理想には正しきものと誤れるものとある。名譽、利益、乃至其他の物慾を理想とし、外に在るもの求めること

一 道徳的理想的の確立

とは、吾等の生命を滅ぼし、死に入らしめる虚偽の理想である。唯だ道を理想とする一念のみ、能く吾等の生命を長養して死を超脱せしむる眞実の理想である。人の欲するところ生命より甚しきは無く、その悪むところ死よりも甚しきは無きに拘らず、虚偽の理想に安んじて真箇の理想を知らざる者は、世に憐れむべき極みである」——中江藤樹。

獄裡のソクラテスが、毒盃を前に從容として宣告せる如く、吾等の求むべきは單なる生命に非ず、實に善き生命でなければならぬ。吾等は一箇の生物として、拒むべくもなき自然の一部である。自然の一部としての吾等の生活は、必然一切の生物に共通なる自然的・器械的因果の鐵則に縛ばられ、本能的衝動の導くままに、唯だ個人的自己保存を目指して進んで行く。さり乍ら是くの如き自然的生活、ソクラテスが斥けたる單なる「生命」は、決して人生の全体にも非ず、また其の重要な一面でもない。是くの如き自然的生活を超出する時、フィヒテの言を藉れば「自然に対する理想の支配 Herrschaft der Vernunft über die Natur」が行われる時、而して一層深刻にはシュライエルマッヘルの所謂「理性と自然との帰」 Einswerden der Vernunft mit der Natur」が実現される時、又は素莫なる哲学的術語を用うれば、不可不 Müssen の世界を出でて尙為 Sollen の世界に入る時、法則の國を出でて規範の國に入る時、吾等の人間としての面目

人格的生活の原則

が、初めて煥乎として露呈し来るのである。

根本的當為、絶對的規範、従つて至高の善は、之を理想と呼ぶ。眞実・堅固・雄大なる理想を確立し、之を現實に實現し行くことによつて、吾等の眞箇の生命——善き生命が長養せられ、走屍行肉としての生活が、初めて人間としての生活となる。この理想を確立すること——眞木和泉の所謂「人なる道を知りて人たる事業をなさん」との目的を確立することを、吾等の祖先は立志と呼んだ。而して冒頭に引用せる中江藤樹の文章に明瞭なる如く、東洋の偉大なる人格者は、皆その深刻なる体験から、立志を以て人格的生活の礎と教えて來た。例えば朱子は「志を立つるは饑渴の飲食に於けるが如きを要す。才に悠々あれば便ち是れ志立たず」と誠しめて居る。王陽明の伝習録には一層懇ろなる示弟立志説がある。倫理的原則を明瞭に把握せる点において、恐らく近代日本の第一人とも称せらるべき山鹿素行も、武士の人格的陶冶を目的として筆を執りたる「士道」の中に、先ず初篇三章に亘りて簡潔剴切に立志を論じて居る。

理想を把持して之を現實の生活に實現し行く人、即ち志を立てて之を遂行する人を、東洋に於ては或は君子と云い、或は大丈夫と言ひ、或は志士と言ひ、或は単に士と呼びて、之を凡夫又は小人と區別した。凡夫又は小人とは、言う迄もなく志なき者、理想に生きざる者、自然的生活に甘んずる者のことである。今日に於ては、志士又は有志家と言えば、専ら政治運動乃至

一 道徳的理想的の確立

社会運動に奔馳する人々を指すことになり、而も其の多くは中江藤樹が「仮志」の人として憫殺せる名利の徒たるに至った。吉えの志士は即ち然らず、志人仁人と並び称せられ、一身を殺しても理想を護持する雄健なる人生の戦士であつた。

さて理想の確立とは、至高の善を認識して、之を絶対の規範とすることである。而して至高善の体現者、換言すれば完全なる人格者は、儒教に於ては聖人と呼ばれるが故に、立志とは聖人たらんとの志を確立することである。中江藤樹が、若年にして「大學」を読み、天子より庶人に至る迄、一に是れ皆な身を修むるを以て本と為すと云う一節に至り、感激の涙に衣を沾しつつ、「幸なるかな此經の存せること、聖人豈学んで至る可からざらんや」と覚悟した時に、後に近江聖人として百世の師たるべき彼の理想が確立したのである。伊藤仁斎は「人若し志を立てて回らず、力め學んで倦まざる時は、以て聖となるべく以て賢となる可し」と言い、貝原益軒もまた「天下一等の人たるを志す可し」と說いている。総じて皆な理想とは必然至高善の理想に外ならざるを語るものである。

キリスト教の悔改及び回心、仏教の懺悔及び発心は、其の道徳的意義に於いては立志と等同一味である。悔改とは心を一変すると云う意味のギリシヤ語 Metanoia の翻訳であり、消極的に現実の自己を恥じ、積極的には一層高き生活に入らんとの志を抱くことである。回心も同じ

人格の生活の原則

く高き生活を目指して心の方向を転ずることである。懺悔は恐らく梵語 *Ksama* の漢訳で、本来罪の赦ゆるしを乞う意味である。罪の赦ゆるしを乞うことは、現実の生活を否定して理想の生活に入らんと欲求することなるは言う迄もない、発心とは仏陀たらんとの理想を抱くことである。斯くてキリスト教に於ても、人間の最後の理想が神と等しきものとなるに在ることは、キリストが山上の垂訓に於て「爾なまどもがら曹まよひ天父まいたの完まつたき如く完まつたくなる可べし」と言えるによつて明かである。而もキリストは、更に「吾わを見し者は父おやぢを見しなり」と宣言したるが故に、キリスト教徒はキリスト其人を以て完全至上の人格者とする。名高きトマスの「キリストに倣なぞいて」は、キリストを至高善の体現者とし、信者をして之に倣なぞわしめんとするものなるが故に、若し此書を儒教の言葉に翻訳すれば、取りも直さず「聖人の道」となる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

二 人格の無限性

立志とは聖人たらんとの理想を確立することであるとすれば、倫理的生活の公理は、總ての人が聖人たる可能性を本来具足して居ると云うこと、換言すれば人格の無限性と云うことでなければならぬ。人格、従つて個々の人間は、其自身に於て無限を実現する可能をえたるもの、換言すれば無限の内容を有する特殊相である。而して人格とは、竟に合理的に知り、道徳的に行う力の主体なるが故に、個々の人間は、其の理性によつて事物一切の意義を究尽すべき無限の可能性と、其の意志によつて此の特殊なる生活の上に、知り得たる事物一切の意義を完全に実現すべき無限の可能性とを有するものである。儒教に於ては此の力を良知良能と呼んで居る。吾等自身の裡に、是くの如き力を本来具有して居ることが實に、倫理的生活の根柢をなすもの

人格的生活の原則

である。

カントは、其の厳肅深刻なる経験から、下の如く述べて居る——「吾等の感性をして道徳の為には如何なる犠牲をも払わしむる能力を吾等が所有して居ること、吾等が為すべき事を容易に且明白に知りて之を実行する力あること、感覚者に対する此の超感覺者の優越、吾等の裡に本具なるこの道徳的天賦は、げに常に高まり行く至高の驚異の対象である。而も此の不可思議に迷わされ、若し此の吾等の裡なる超感覺者Das Uebersinnliche in unsを、超自然なる者、即ち全然吾等の力ならざる者、本来吾等に属せざる者、吾等ならぬ一層高き聖靈の力なるかの如く考うるは謬見である」と。これは正しく王陽明の次の一詩の註脚として傾聴すべきものである——

無声無臭獨知時 此是乾坤万有基

抛却自家無尽藏 沿門持鉢儼貧兒

眞に自己の裡に無限性を認め、その開発の疑なきを信ずることによつて、初めて吾等の善き生活が現われる。若し之れ無くば、吾等の道徳的生活は、所詮形式的、外面的のものとなる。是くの如くならんには、説かるる処の教義、掲げらるる処の律法が、如何に莊嚴を極むるにし

二 人格の無限性

ても、竟に吾等の内面的生活に対して権威を有することが出来ぬ。道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ざる所以は、實に道徳とは自己の本性より出でたる法則 Autonomie によつて実現せらるるものなるが故である。この道理はカントに依つて最も精密に主張せられたりしとは言え、東洋の偉大なる思想家にとりては殆んど自明の真理とされて來た。孟子の如きは明白に「仁義礼智は外より我を鑠する（めっきする）に非ず、我固より之を有するなり」となし、心を尽す者は性を知り、性を知る者は天を知ると云つて居る。陸王の学に至りては、最も此の一点を力説し、道徳は心外より來りて心内に入るものに非ず、却て人心の裡に存する道念の生々不息にして、常に外に向つて發動するものなるを明かにせんと努めて居る。仏教は一層端的に説く――

「一切衆生は煩惱の中にありとも常に汚れざる如来藏あり、徳相具足して我と異ることなし。」

多くの事柄に於て吾等の師であるアリストテレスは、次の一事に就ても、極めて適切なる教訓を吾等に与えて居る。即ち事物本来の面目は、腐敗せるものに非ず良好なる状態に在るものに就て之を觀取せねばならぬ様に、人間の場合に於ても、その真面目を把握しようとするならば、肉体と精神とが最善に形成されて居る者に就て観察せねばならぬと云うことである。未熟なる又は腐敗せる林檎によつては林檎の真箇の味が味い得られぬ如く、人間の真骨頭も、又未開人や童蒙や乃至は小人凡夫に就て之を看取すべくもない。然るに當世に時めく傾向は、アリ

人格的生活の原則

ストテレスの教訓とは全く反対に、聖人英雄を以て例外者と斥け、専ら醉生夢死の徒に就て人間の本質を摑まんとして居る。かくてはカントの所謂感覺人 Der simliche Mensch の本質を認識し得ても、竟に超感覺人 Der uebersinnliche Mensch の本領を把握すべくもない。古人が「千人の諸々は一士の諤々に如かず」と言える如く、人間の精神的生活を検討するに当つては、千の小人の経験よりも、一の偉人の経験を重んぜねばならぬ。数量を真理の標準とすることは、仏典に舎衛國の鼻欠猿の比喩を以て示されて居る如く、荒涼至極の沙汰である。げにソクラテスが死を面前に其の弟子に告げたる遺訓は下の如くである——「汝等なむじら一物を失なあかうも尚且幸福なるを得べし。唯だ人性の善なるを信よよ！」

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

三 羞 耻

羞惡の心なき者は人に非ざるなりとは、孟子の名と共に千古不朽なるべき真理である。人間の恥づる所、固より多端である。而も其の最も原始的なは自己の自然生活、わけても性的行為を赤裸々に露呈することに對して抱く羞恥の情である。人間は紛う可くもなき一の動物であり、動物としての人間は必然生物学的原則によつて支配せられ、動物と共通する生活を営まねばならぬ。異性相慕い、渴して飲み、飢來りて喫するは、極めて自然なる生活であるのみならず、飲食男女の欲を初め、一切の自然的欲求は、人間がその生命を存続するためには必要なるもの、従つて適当に満足を与えるべきものである。然るを人間は——精確に言えば動物のうち人間のみが、何故に其の自然なる生活、自然に支配せらるる生活を、如実に露出することを恥と

人格的生活の原則

するか。

先ず明白なる論理によつて、人間が恥づる処あるは、恥づる処のものを超越せる或者を、自己の衷に有するからでなければならぬ。人間が自然的生活、肉体的生活を恥づるは、之を超越せる或者が、人間の衷に在るからでなければならぬ。この内在者が、肉体的生活及び之に伴う一切の感情欲求よりも、一層人間的なるもの、自己に取りて一層貴きもの、即ち一層価値あるものと感ぜらるるが故に、肉体に支配せられることを以て、人間としての真箇の面目を傷わるるが如く感じ、茲に羞恥の心湧き来るるのである。故に羞恥とは、劣れる価値のものに支配せられ、之によつて人間の人間たる所以を没却し去らるる事に對して抱く不安不満の心である。

試に禽獸の生活を見よ。そは特殊の生物として現われたる特殊の生活に固着し、生れて死ぬるまで、ただ自然的自己に囚われ、毫も之を出離することが無い。彼等は其の特殊の生活に伴う一切の自然的欲求に対し、啻に恥づるところ無きのみならず、如何なる方法を以てしても、之を満足せしむることにのみ汲々として居る。されば打ち見たる所禽獸の生活は、如何にも自由奔放なるが如きに拘らず、まことは飽迄も自然的自己に縛られ、其の生命の流れは、自己と云う特殊の限界に局塞せられて居る。唯だ人間のみが、恥づる処ある故に能く自然的自己に克ち、自己に克つが故に動物的必然を超出し、斯くして初めて真箇の人間的なる生活、取りも

三 羞 恥

直さず道徳的生活に入る所以である。遺教經に下の如き濃なる一節がある——「慚恥の服は、諸の莊嚴に於て第一となす。慚は鉄の鉤の如く能く人の非法を制す。この故に行者當に慚恥すべし、暫くも替るなけれ。若し慚恥を離れなば即ち諸の功德を失う。有愧の人には即ち善法あり、無愧のものは諸の禽獸と異なるなし」。

されば孟子が羞惡の心を義の端緒となせるは、透徹せる洞察である。道義感情と呼ばれる処のものは、詮ずるところ羞恥の感情に外ならぬ。現に「予は之を恥づ」と云うことは、まさしく「予は之を惡なりと感ず」と云う意味である。義の一字を以て最も剝切に表明せらるる狹義の道徳は、實に其の人性に於ける自然的根柢を羞恥の心に有する。

さり乍ら羞惡の心は、一の感情なるが故に、夫自身に於て善でもなく惡でもない。換言すれば羞恥そのものは直ちに道徳的でない。そは唯だ道徳の「端」たるに止まる。それが道徳的となる為には、必ず鍛錬陶冶を経ねばならぬ。人は往々にして恥づ可からざるを恥じ、恥づ可きを恥じない。敝れたる襦袍を衣て、狐貉を衣たる者と立ちて恥じざるは、子路にして初めて能くする所である。吾等は何を恥じ、何を恥じてならぬかを、はつきりと自覺せねばならぬ。女子は必ずしも腕力なきを恥じず、軍人は料理に精しからざるを恥じぬ。人の當に恥づ可きは、自己の眞面目が没却し去られんとする時である。之を抽象的に言えば、人ならざるものによつて

人格的生活の原則

人が支配せらるる時、自然によつて精神が左右せらるる時、吾等よりも下位に立つものの為に
吾等の^{われら}人間としての本領が傷わるる時、是くの如き場合に於て吾等は恥づる所無ければならぬ。
而も具体的事實としては、一切の人、皆それぞれ一ありて二なき個性を有し、且^{かつ}それぞれ獨一
無二なる分担を現実生活に於て有するが故に、的確に自己の本領を把握する為には、深刻透徹
せる反省を要する。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

四 愛 憐

羞惡の心と相並び、人性に於ける道徳の自然的基礎をなすものは、孟子の所謂惻隱の心いわゆる即ち愛憐の情である。知恥の心は人間の又之これを有する。そは人間ならざるものより人間わがを別わけて、慈いては一人の人間より他の人間わがを別わけて、各人をして独自の面目を確立せしむる力たるべきものである。然るに愛憐の情は、人間ならざる生物も又之これを有し、自他を別わけつに非あず却かえつて自他を融合せしむる力となる。そは親が其子そのに対して抱く愛情に於て、最も原始的なる相を示し、羞恥の場合と同じく、発するところ多端を極めて居るとは言え、根柢深く探り入れば、實に自己と等しき生命を有するもの、価値おに於て自己と同位なるものに対し、其の生々發展を希求する感情である。

SAMPLE
Shoshinsui.com

人格的生活の原則

孟子が例証を以て説きたる如く、人が小児の井中に陥らんとするを見て、怵惕惻隱の心（他感の事でもいたましく感じり深き思ひやり）を起すのは、決して小児の両親に交際を求める為でもなく、郷党朋友に誉めそやされたい為でもなく、不人情と誹らるるを恐れる為でもなく、實に人に忍びざる心の自然の發露である。忍び得ないと云うのは、生命の害なわるるを見るに忍び得ないのであり、吾等がこの感情を本来具えて居るのは、吾等の生命は多かれ少なかれ他人の生命裡に入り込み、他人の生命も亦吾等の生命裡に入り込んで居るからである。故に吾等の心裡には、他は「われらの為めに、己れは他の為に生きることに依つて、相互の生命を完成せしめんとする根強き要求がある。この要求あるが故に、吾等は自己以外又は以上の生命と交通せば止まぬ。かくて吾等の生活は他人の為の生活、他人の生活は吾等の為の生活となる。偉人とは、其の一ありて二なき個性を發揮することによりて、普通の人よりも遙に多数の人々の為に生き、且多数の人々の衷に生きると同時に、それだけ多数の人々が彼を通じて生き、且彼の為に生きて居る人々を謂うのである。キリストが、首たらんとする者は僕たる可しと言えるは、まさしく此の意味である。

自我を以て單に個体の中に限らるるが如く思惟するは、明白に一個の謬見である。單に生理的に考えても、吾等の色身は祖先の細胞の分裂であり、子孫の色身は同じく吾等の細胞の分裂である。若し此の関係を前後に際限なく辿り行けば、一切衆生は悉く同一生物であると云うこ

四 愛 憐

とも出来よう。而して之と同様なる関係が、吾等の精神的生活に於て、更に幾層倍の複雑を以て行われて居ることは、何人も拒み難き事実である。吾等の意識的活動は、總て一層大なる意識に其の根柢を有せざるはない。そは恰も松島の八百八島が、欹つものは天を指し、臥すものは波に匐い、己がじし芽出度き姿を競いながら、扶桑屈指の名勝を成しつつあるに譬えることが出来る。而も数多の島に分れて姿も形も異なるのは、唯だ海上に浮んで男波女波に其岸を洗われる間に止まり、一度び波を沈んで底深く探れば、等しく一つ大地に根ざして、頭を飾る松の翠も、膚に纏う苔の衣も、所詮は同じ大地に其の長養を托して居ることが知られる。同様に個々の人格も、一面に於て飽迄独自の面目を發揮し、之によつて波瀾あり光彩ある人生を経緯して居るとは言え、個人的生命は決して絶対に独立して他と関係なき孤立的実在でない。個性的生命の背後には、之を統一する更に偉大なる生命がある。この生命の結合は親子の間に於て最も端的なるが故に、愛情の最も原始的なものが、先ず親子の間、わけても母子の間に起るのは極めて自然のことである。而して此の愛情こそは、共同生活の基礎である。蓋し共同生活とは、己れの生命を他の生命の上に、他の生命を己れの生命の上に実現する生活である。而して共同生活の実を見事に挙げるための努力が、取りも直さず政治である。故に政治の人性に於ける基礎は、必然愛憐の情でなければならぬ。此点に於ても孟子の觀察は鋭くして正しい——「人

人格的生活の原則

皆な人に忍びざるの心あり、先王人に忍びざるの心ありて、斯に人の忍びざるの政あり。」

さて愛憐の情も羞恥の情と同じく、之を自然の儘に発露せしむるだけでは道徳でない。惻隱の心は、仁の端であつて仁其ものでない。之をして仁たらしむる為には、自然的なる愛情を、超自然的なるものに依つて統制し、竟には、超自然的なるものに帰一せしめねばならぬ。孝は妻子に衰うと云われるが如く、愛憐の情は啻に道徳的ならざるのみならず、往々にして不道徳なる場合がある。分けても愛憐の情が偏局する場合は、愛憐本来の意義を失い、却つて自他の生命の長養を阻むこととなる。故に此の自然的基礎の上に道徳的生活を築く為には、真個に愛すべきものを明白に認識し、適切なる愛を之に注がねばならぬ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

五 敬畏

吾等は自己より下位なるものに對しては、之に支配せらるることを恥じる感情を有し、自己と同位なるものに對しては、之を自己と等しく生々せしめんとする愛情を抱く。而して自己より上位なる者に對しては、之に對して敬畏し帰依する感情を自然に有して居る。此の感情も又親子の間に最も原始的に現われる。子が其親に對して有する信頼・敬愛・帰依の心は、羞恥及び惻隱と範疇を異にする感情であり、實に儒教に於て敬と名づけらるる道徳の自然的基礎である。

敬畏の情は、自己よりも上位にある者、自己以上の価値を有する生命、換言すれば自己をして自己たらしむる生命の本原に對して抱く心である。吾等が偉人に對して敬畏の心を起すのは、

人格的生活の原則

其の人格の内に、見事なる生命が躍動して居るからである。独り偉人と言わず、吾等が互に敬愛し合うのは、自他の衷に儼存する偉大なる生命を敬い合うのである。唯だ一層顯著にこの生命を発揚せる人格を、特に「ミコト」即ち「美わしき實現」として、格段に尊敬するのが吾国の古道である。而も一切の人間は、本質に於て等同一味の生命の發現であり、従つて悉く「ミコト」たる可きものなるが故に、吾国に於ては敬意を表示する礼儀が、神に対しても人に対しても同一である。

自己以上の生命、自己よりも価値ある者の存在を自覚すれば、それが高き価値ありと意識せらるる以上、必然之を自己の生命に実現せんとの要求を生ぜば止まぬ。而して一切の価値ある者のうち、至高の価値を有するものは、万有これに依つて存在し、且万有これに依つて統一せらるる生命その者である。固より人は当初よりこの統一的生命を認めるのでない。初めはこの生命の種々相を個別に認め、竟に全相を綜合して最後の實在に到達するのである。此の生命を自身の裡に掲し、自身をこの生命に托せんとする願いは、實に人性の至深處に發して竟に全我を包み去る厳肅なる要求である。この要求並に其の実現が、人格的生活より特に抽象せられて宗教と呼ばれて居る。従つて人性に本具なる敬畏帰依の感情が宗教の自然的基礎なることは言う迄もない。

SAMPLE
Showme-Shinsui.com

五 畏 敬

道徳と宗教との関係に就ては、古来幾多の議論がある。或は両者を以て夫々独立の領域を以て対立するものとなし、或は両者の一つに他を包容又は隸属せしめんとして居る。例えばアウグスチヌスの如き若し神を信ずることなくばギリシャの道徳は表面のみ燐然たる罪惡に過ぎぬとした。道徳は宗教の下位に置かるべきものの如く考えるのは、キリスト教学者の間に普く行わる傾向である。而して一方には前世紀かこの方自然科学の長足の進歩に伴い、從來宗教が教えていた知識上の誤謬が続々と指摘せられ、之がために宗教無用の声高まり、道徳は宗教を離れて存在すべきものと考えられて來た。さり乍ら道徳と謂い宗教と謂うは吾等われらが上來略叙したる所に依つて察せらるる如く、廣義に於ける道徳的生活、即ち人格的生活の一面を形成するものに外ならぬ。その一々を抽象し、それぞれを対象として学的研究を試みることは固より可能であり必要でもあるけれど、現実の人格的生活に於て、或は道徳、或は宗教と言ふが如き特殊の生活があるのでない。三足を具せざれば鼎かなまきが立たず、三邊なくんば立体が出来ぬよう、上位・同位・下位のものに対する正しき関係を實現するに非ずば、吾等われらの善なる生活が成立せぬ。

歐米に於て道徳と宗教とが別箇のものとして対立して居るのは、後章に述べんとする如き歴史的事情によるものにして、人生を渾然ごんぜんたる一体として把握し、その成滿を志す儒教に於ては、別に宗教道徳を分立せしめず之を一個の道統に綜合しておる。孔子が「君子三畏あり、天命を畏れ、おぞ

人格的生活の原則

大人を畏れ、聖人の言を畏る」と言える、孟子が「其心を存し、其性を養うは、天に事うる所以なり」と言える、中庸に「天命之を性と謂う」とある、一として渾然たる具体的道義生活の欠き難き一面を高調せるものに非ざるはない。故に真個の儒者は、皆な敬虔なる宗教的一面を必然に具足して居る。

一個の道統の内にこの一面を具え、而も人格的生活の自余の両面とこの一面とが、相並び相まって進み行く限り、特に此の一面のみを取り立てて一個特殊の組織とする必要はない。ただ三面の進化が跋行する時、換言すれば自余の両面と相伴わざる、又は進化の道程を異にせる、而もその進化の程度が他の両面と格段に相異なる宗教的一面が、新たに現出し來りて人心を動かす時、例えばヨーロッパ史に於てユダヤ人の信仰がローマ人に伝えられ、更にローマ人からゲルマン人に伝えられし場合、或は未開人に高等なる宗教が伝えらるる場合の如きは、勢い全体としての人格的生活の調和破れ、従つて両者の対立又は争闘を免れず、茲に道徳と宗教とが別箇のものとして意識される様になる。既成宗教の信者に非ざれば宗教家に非ざるが如く考うるは、歴史的事情に依つて宗教が特殊のものとして発達したる歐米思想の感化である。人はキリスト教徒乃至仏教徒たる事なくして、能く人性の宗教的一面を長養する事が出来る。其の実例は日本及び支那の諸偉人に於て枚挙に違ない。而して既成宗教の信仰が、却つて人格の玲瓈無碍な

五 敬畏

る發達を妨げる実例も、また吾等が日常目睹する所である。

この敬畏帰依の感情も、また道徳の自然的基礎なる点に於て、前に挙げたる二つの感情と異なる所無い。故に徒らに自然の発露に任せては、敬う可からざるを敬い、帰依すべからざるに帰依し、却つて道徳的生活の障碍となるに終る。當世の政治家が飯野吉三郎を挙し、相場師が羽田稻荷に参詣するのは、其の人性に於ける自然的根拠は、西郷南洲が天を敬し、乃木將軍が明治天皇に歸命したのと何等異なる所なき感情の發現である。而も両者の懸絶する事白雲万里なるは、唯だ是れ鍛錬淨化を経たると否とによる。仏教キリスト教を初めとし、所謂宗教の人生に対する価値は、其の特別なる信仰・制度・儀礼に依つて此の感情を淨化し、自然を精神化する所に存する。これ各種の宗門が指月の指に譬えらる所以である。月は指の方向に輝いて居る。而も月光を仰ぐ為には其眼を指より離さねばならぬ。若し然らずば、指頭を眺めて一生を終るであろう。かくては宗教は人生を固陋ならしむるだけである。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第二
人格的
生活の
原理

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

人格的生活の原則

一 克己の原理

羞恥・愛憐・敬畏は、吾等が自己より下なるもの、自己と同じきもの、自己より上なるものに對して抱く本具の感情である。而して吾等の一切の道徳的關係は、究竟して如上三者の外に出でざるが故に、此等の三つの感情は、吾等の人格的生活の自然的基礎であり、此の基礎の上に確乎たる道徳的原則を打立てねばならぬことは、事物必然の論理である。吾等より下位なるもの、吾等と同位なるもの、吾等より上位なるもの——此等の三つの道徳的対象は、古來簡潔に天地人三才と呼びならわされたるが故に、道徳的原則とは、取りも直さず天地人に対する道である。⁽¹⁾完全なる人格者たらんとする吾等の厳肅なる道徳的要求は、實に天地人に対してそれぞれ正しき關係を展開し行くことによつてのみ、之を満足せしめることが出来る。孔子は「君子

一 克己の原理

は器ならず」と言つた。若し叙上の^{ひとと}一を欠いては、仮令其人は如何に見事なる「器」となり得たとしても、竟に真個の君子たるを得ない。かくて吾等は此等の原則の一つ一つを探究し行くであらう。

第一には地に対する道である。地とは価値に於て吾等よりも下なるもの——精神に対する自然である。その吾等と最も直接なるものは、言う迄もなく吾等自身の肉体的生活、並に之に伴う感情欲望である。而して其等の一切の肉体に即する欲求のうち、最も強烈なるは男女の欲である。而も人間の精神は、其の極めて低き發達の程度に在る時でさえ、この欲求によつて征服せられ支配せらるべきを恥じた。旧約にアダムとエバが、禁断の果実を味いて其眼開ける時、初めて其の裸体なるに気付き、無花果の葉を以て腰辺を蔽^{おお}うたと記して居る。こは意味深き神話である。まことに彼等は、其の裸体を恥じたる時、且^{かつ}之を恥じたることによつて、初めて動物的生活より超出し、従つて初めて人間の祖先となり得たのである。

蓋^{はだ}し一切の生物は、意識的また無意識的に、種族存続のために生きて居る。植物の如きは、唯だ花開き実結びて、其の生命を次代に伝え行く以外、また生存の意義なきが如く見える。かくて多くの草は、実を結びさえすれば枯れ果てる。動物の場合に於ても、其の生活の主目的は、犬や猫として現われたる生命の特殊の相^{すがた}を、生殖によつて永遠に存続することに在る。個々の

SAMPLE
ShowshelfShinsui.com

人格的生活の原則

動物はただ与えられたる有機体の特殊相を、過去より未来へと伝える連鎖の一つとして出現せるものとも觀られ得る。故に生殖は彼等にとって無上至極の関心事であり、性的本能は一切の諸本能のうち比類なく強烈である。故に彼等は、全く無条件に性的欲求に服従し、何等の顧慮自制なく、驀地に（まっし）此の本能の導くままに行動して、また他事あるを知らぬ。

人間も亦一個の生物である限り、男女の欲が人生に対して強大なる力を有することは言う迄もない。それにも拘らず、殊に動物にとりては至高無上の力を有する性欲が、人間の場合に於て却つて恥づべきものとされることは、深甚なる意義を包藏するものでなければならぬ。そは必ず人間が單なる動物に非ざること、單なる動物を超出せるものなることを確実に立証する。吾等の恥づるは實に動物の如くなるを恥づるのである。然らば性的に動物の如く行動するとは如何なる意味であるか。げに動物に在りては、永遠無限は唯だ種の存続と云う外面的・自然的事実に有するが故に、此の目的の為の手段又は道具たることが、其の生存の最後の意義であり、従つて生殖は動物的生活の本質をなして居る。然るに人間は、自然的進行のうちに、他動的又は無意識的に永遠を把握するに非ず、自己其者のうちに永遠無限を實現せば止まない。吾等の生くるは、人間と云う有機体の特殊相を、生殖によつて子々孫々に伝えんがために非ず、不朽な

一 克己の原理

る自我の確立によつて永遠の生命を自ら撫得するがためである。吾等は夫自身が目的であつて、如何なるものの手段でもない。吾等は永遠の生命の手段たるに満足せず、自ら永遠の生命の護持者たるべきものである。かくて人間に於ける男女の欲は、決して動物に於けるが如くなるを得ぬ。人間は此の欲求を支配すべくして、盲目的に之に屈従すべきものでない。而して此の欲求は、自然的生命の最も根本的なる力であるだけ、これに対する態度に於て、それだけ吾等の^{おれら}人間性が本質的に現われることも、また当然の論理である。さればこそ古えより性欲の禁制が道学者・宗教家によつて甚しく力説されて來た。宗教に於て特に然りである。

さり乍ら全然男女の欲を禁遏することは、之を一切の人に求むべくもなく、また望ましきことでもない。吾等の性欲に対する態度は、自余の自然的生活及び之に伴う感情欲求に対して然かあるべき如く、先ず之を克服し、進んで之を精神化することでなければならぬ。人間の場合における、性欲は恋愛となることによつて、既に自然より精神へ挙揚されて居る。恋愛は、今日の学者がしたり顔に主張する如く、美しき仮面を被れる性欲に非ず、自然的性欲が精神化せられて高き情操となれるものである。その本質は、プラトンが説破せる如く、男女が其の失える半ばを求めて一個の「人間」たらんとすることに在る。そは單なる生殖の希望に非ず、實に最も具体的なる人格的生活を慕うこころである。故に古人は下の如く道破した——「君子の道は端を

人格的生活の原則

夫婦に造し、其の至れるに及んでは天地に察かなり」と。

男女の欲に次いで根本的なる自然的欲求は飲食の欲である。而して人間に在りては、他人の慈悲に露命を繋ぐ乞食でさえ、犬に与える如く食を投げ与えれば、飢を忘れて憤りを発する。彼は是くの如くにして其の食欲を満足せしむることを恥づるのである。渴しても盜泉の水を飲まざる処に、自然を超出せる人間の面目が現われる。「武士の子と云うものは、腹が減つても饑じゆうない」と言わしめる政岡流の教育は、偽善を人間に強いて天真の発達を傷うと云う非難を、屢々吾等は耳にする。喜怒哀楽を色に出してならぬと云う東洋伝統の躰も、亦常に同様の非難を受けつつある。総じて人間界のこと、百利あつて一害なく、百害あつて一利ないと云うが如きは無きが故に、叙上の教育も固より多少の弊を伴わぬとは言わぬ。而も其の拠つて立つところの根本義は、實に万代不易のものであり、軽々に之を非難するは、却つて其人の修省足らざるを示すものである。蓋し教育の志すところは、竟に人間をして人間たらしむることに在る。而して飢えて食わず、悲んで泣かず、怒つて叫ばざる底の修養は、人間眞個の面目を發揮する上に、断じて欠き難き鍛錬なることを忘れてはならぬ。人は啻に「腹が減つても饑じゆうない」のみならず、自ら折んで餓死することさえ可能であり、且其の餓死によつて人格の権威を不滅に確立することが出来る。かくして伯夷叔齊は、周の粟を食むを恥じ、餓死して顧みざりしが故に、

一 克己の原理

其風そのを聞く者をして、頑夫がんぶつも廉に(いさぎよ)（正しく）だふ、懦夫わいふも志を立つるに至らしめる。

かく考え來りて、吾等われらは克己復礼と云う孔子の深遠なる教説に想到する。礼とは自然的生活を人間的に當むことである。一切の自然的欲望は、人間が生物である以上、必ず適當に之を満足せしめねばならぬ。而も之を禽獸きんじゅの如く満足せしむるは吾等の恥づる所なるが故に、必ず人間的に自然的生活を當まねばならぬ。礼とは西博士さいが剝切はがせつに説明せる如く「人の自然的生活と、其かれを超出来る精神力とも云うべきものとの融合」(2)である。そは自然的生活を節制し、其醜そのを抜きて之を美化し、一面に於ては必要なる自然的欲求を充たしつつ、而も同時に之を超出し且支配する処に、一切の人間的なものうち最も人間的な面目を有して居る。荀子は礼について下の如く說いた——「礼は何に起るや。曰く人生れて欲するあり、欲して得ざれば則ち求むるなき能わづ、求めて度量分界なくんば則ち争わざる能わづ、争えば則ち乱れ、乱るれば則ち窮す。先王は其亂そのを惡む、故に礼儀を制して以て之を分ち、以て人の欲を養い、人の求めを給し、欲をして必ず物を窮めしめず、物をして必ず欲に屈きざらしむ。兩者相持して長し、是れ礼の起る所なり。故に礼は養なり」と。⁽³⁾まことに礼は養である——必要なる自然的欲求を人間的に満足せしむる様式である。而して貝原益軒は一層適切に礼の本質を闡明せんめいして下の如く教えた——「人に血氣あり、身口意耳目体の欲あり、心に喜怒哀樂の情あり。もし礼を以て之を節せざれば、

人格的生活の原則

人欲にしたがい天理を失いて、人事乱れ人道すたる。ここを以て聖人礼を以て教とし、彼の血氣より起る情欲をふせぎたまう」。⁽⁴⁾孔子が、非礼視る勿れ、非礼聽く勿れ、非礼言う勿れ、非礼動く勿れと教えたのは、動物の如く視聴云為する勿れとの意味である。而して其為には實に己れに克つことを必須の条件とする。

さて吾等は、自己の衷なる自然に支配されてならぬ如く、自己の外なる自然即ち「物」に支配されてはならぬ。物が人生に對して有する恐るべき力は、其の最も象徴的なる黄金の場合に於て特に明瞭である。キリストは「富者の天国に入るは駱駝の針の孔を通るよりも難し」と言った。富者とは黄金に支配されて居る人の意味である。古來如何に多くの人々が、實に黄金のために其の人格を傷われたか。黄金を獲得し、且所有せんとの度に過ぎたる欲が、如何に多くの人々をして人間ならぬ「守銭奴」に堕落せしめたか。古えの武士が、手を阿賭物（金錢のこと）に触れることをさえ恥じたと云うのは、武士の体面を黄金のために汚されまい為の心懸である。さればこそ古人も、飲食男女の欲と相並んで、厳に金錢の欲を戒めて居る。

固より自然其者は、吾等の衷に在ると外に在るとを問わず、それ自身に於て善でも惡でもない。善惡は自然に存せず、自然に対する吾等の態度——吾等が自然に對して正しき關係を實現するか否かに在る。此の關係に於ける吾等の道徳的生活は、自ら三つの契機から成立し展開する。

一 克己の原理

即ち第一には自然と精神との対立、並に自然に対する精神の優越を意識すること、第二には精神の優越を確立するために自然を克服すること、第三には克服したる自然を精神化すること是れである。此等の三つのうち、第一は羞恥の感情が吾等の為に既に必然なる自然的基礎を与えて居り、而して第三は、吾等が精神の優越を確立する程度に応じて実現せられ行くものなるが故に、道徳的生活に於て主として対象とせらるるは、第二即ち自然克服の努力——精神の独立の為の戦いである。これ古えより克己制欲の法説せらるる所以であり、甚しきに至りては禁欲を以て至高の善——従つて人生究竟の目的とさえ考えらるる所以である。さり乍ら克己制欲は人格的生活の第一条件であるけれど、決して最後の目的でない。此の二つは決して混同を許さぬ。吾等の克己は、それ自身が目的に非ず、實に不朽の自我を確立する為の克己である。

- (1) 支那に於て学者とは天地人三才に通ずる者と考えられて來た。此の「通ずる」と云うことは、決して單に知る意味でない。そは自然的自我に局塞せず、優に之を超出して天地人の真義を把握し、之を自己の生活に実現して融通無碍なるべきを云うのである。朱子は「通」と「塞」とによつて、人と物とを區別して居る。
- (2) 西晋一郎著「倫理哲学講話」第一七八頁。
- (3) 荀子礼論篇。

人格的生活の原則

(4)

貝原益軒著「五常訓」。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

二 愛人の原理

己れに克つこと——身を修むることは、明かに人格的生活の基礎である。而も克己制欲は、天地人に対する三つの関係の一に外ならざるが故に、吾等の道徳は之のみを以て全きを得ない。このことは二三の事実を挙示すれば直ちに明瞭となるであろう。例えば之をインドの苦行者に就て見よ。彼等の或者は數多の長釘を逆さに打つけたる板の上に坐臥して居る。或者は双脚を樹枝に縛りて倒懸して居る。また或者は双手を空中に差上げたまま幾日も趺坐して居る。或者は一個月乃至二ヶ月の断食をして居る。總じて彼等の難行は、親しく目撃せる人にあらずば信じ難きほどの自己呵責である。その己れに克つ力、苦痛に耐える力は驚嘆に堪えぬけれども、實際は人生を高めずして却つて之を堕落せしむるだけである。西洋古代史の末期、エジプトに於て

SAMPLE
ShoShinsui.com

人格的生活の原則

勃興せるキリスト教の禁欲主義も、全く同様の過誤に陥つて居る。而して更に中世に於けるローマ教会の聖職者を見よ。彼等のうちには吾等をして尊敬に堪えざらしむる厳肅なる禁欲生活を送れる人々がある。而も此の敬虔にして貞潔なる教父の、異端者又は異教徒に対する態度に至りては、真に殘忍酷薄を極め、之を焚殺することさえ神への奉仕と信じて居た。かくて吾等は、自然の超克だけでは決して完全なる人格を養い得ざることを知る。かくて吾等は人に対する道を正しくせねばならぬ。

人に対する正しき道の自然的基礎は、吾等が既に述べたる如く惻隱の情である。この感情が道徳にまで高められて眞個の愛となりたるを儒教に於ては仁と呼び、仏教に於ては慈悲と呼ぶ。その最も根本的な発現が、母の其子に対する愛なることは言うまでもない。男女は相恋して初めて人生に目覚め、而して女子は母となりて初めて深刻に人生を味う。子に対する母の愛は、最早一個の感情に非ず、實に喜怒哀樂乃至一切の人情を籠め尽したる千情万緒の一体体系である。さればこそ孔子も「仁者は能く人を好み、能く人を悪む」と言つた。無心に嬉戯する幼児を見て、或時は母のこころ歡喜に満ち、また或時は不憫を催うして双眼われ知らず涙に曇る。その喜ぶは生命の健やかに展び行くを喜ぶのであり、その悲しむはやがて遭逢せねばなるまじき嶮危なる世路を憂うるのである。故に母の愛は其子の生命の全相又は全体を対象とする